

## 旧約の真の成就者としてのキリスト

主イエスは「山上の説教」において「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消え失せるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない」と言われた。この主イエスの言葉は、聖書の宗教、つまりキリストの福音について、驚くべき主張を含んでいる。「律法と預言者」とは旧約聖書全体を指す慣用句であるが、その旧約の全教え、全宗教体系の目的と意図は、イエス・キリストの到来において成就し結実したという主張である。

キリストは、旧約聖書の教えとはまったく違った教えを宣べ、まったく新しい宗教を打ち立てたとか、旧約の預言者たちが教えたこととまったく違った教えを広めはじめた、というようなものではなかった。主イエスの福音は決して新奇なものではなく、神が旧約の昔から預言者たちを通して約束されてきた、その約束（計画）の成就だったのである。主イエスご自身、幾度もそのことを主張され、弟子たちの目を開かれた（ルカ24：25～27、44～48、ヨハネ5：35～47）。

使徒ペトロも、我々はイエスに関して巧みな作り話を語ったのではない、我々はキリストの栄光の目撃者であった、キリストは旧約の預言の成就者として来られたお方なのだ、力強く語り（第2ペトロ1：16～20）、使徒パウロも、神の約束はことごとくキリストにおいて「アーメン」となった、と宣言し（第2コリント1：20）、キリストの福音が長い歴史の中で、着々と準備されて来た、神の人類に対する救いのご計画の成就以外のなにものでもないことを力強く教えている。

丁度、一定の焦点をもつレンズが光を一点に集中するように、旧約の全教え、全宗教体系は救い主イエス・キリストを指し示していた。そしてその通りに救い主としてこの世にお出でなされた。キリストの福音は、人間の理性が造り上げた宗教体系や観念でも、また、人間の宗教的熱心が生み出した願望や希望でもない。それは、歴史のただ中に実現し、成就した人類に対する神の救いの約束だったのである。

旧約の全歴史はメシア待望の歴史であった。旧約の全頁に、私たちはそのような待望に生き、そのような信仰に命をかけた人々の記録と見ることができる。ヘブライ書の記者は、アブラハムを始め、彼に続く旧約の聖徒たちのそのような信仰に生きる姿を生き生きと描いているが、その描写は感動的である（ヘブライ書第11章参照）。

そして、それに続く第12章で、新約の聖徒たちに、目標を目指してひたすら走る競走者の生き生きとした例えを用いて、次のように勧めている。「こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか。信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。」と（12：1、2）。私たちの信ずる主イエス・キリストこそ、神が預言者たちを通して約束された救いの恵みの創始者でありまた完成者であられた。